

書評

桑木野幸司 著

『ルネサンス庭園の精神史』

(白水社、二〇一九年)

根占 献一

(一)

ルーミアニアの著名なイタリア研究者だった Alexandru Marcu (1894-1955) は *arte* という単語を使った書名において、この *arte* を造形芸術のみに使うのではなく、実生活レベルでの審美的表現全体の諸価値とルネサンスの新たな人間間の関係を言い表すために用いると述べている¹⁾。それは第二次世界大戦中のことであり、刊行年一九四三年はイタリア現代史の転換点となった年であった。一九世紀半ば過ぎにルネサンス文化の古典となる書を公刊した Jacob Burckhardt (1818-1897) の影響が色濃い著作だが、そのなかで *L'arte dei giardini* に一章を捧げている。すなわち同文化での庭園が描写され、その意義が問われている。

イタリア・ルネサンスの魅力は多様な面に現われ、庭園文化もまたその一つである。もう一冊、幾らか新しい書物を紹介しよう。まだ評者が学部生の頃に出た本で、庭園を含めた景観、*landscape* の歴史をリードした研究者たちの論文集成となっている²⁾。題名には庭園の単語しか現れていないが、遊び紙に *First Dumbarton Oaks Colloquium on the History of Landscape Architecture* の文字が現われる。そして編集者はイタリアの建築と庭園の研究に画期をもたらした学者、David R. Coffin (1918-2003) であることが分かる。寄稿者たちは Eugenio Battisti (1924-1989), Elisabeth MacDougall (1925-2003), Giorgina Masson (1912-1980), そして Lionello Puppi (1931-2018) の四名でこの当時の代表的研究者が名を連ねている。プッピはいかにもイタリア的な大学人で左翼の政治家でもあった。コッフィンは序で、二〇世紀初頭から今日に至るまでのイタリア庭園研究の歴史と研究者たちの名を挙げている。言明していないものの、ナチズムとの関係が深まる時代にファシズム政権下での庭園史研究の頓挫が暗示される。なおこの *Dumbarton Oaks Garden* は世界的に有名であり、*Dumbarton Oaks* の名を冠して出たことはシンボリックであろう。

ここで名の出た研究者などの庭園関連の著述に言及し

て、研究の一端を覗いてみたい。先ずコッフィン手元にある三冊から題名を示すがすべてを語っているように思われる。『ルネサンス期ローマの生活のなかのヴィツラ』、『教皇座ローマの庭園とガーデンング』、そして最後の作となり、生前に出なかった『ピッコ・リゴリーオー——ルネサンスの芸術家・建築家・好事家』である。最初と最後の書の序文は重要で、一方は時代概念を、他方は作者の精神生活を知ることができるだろう。ローマは教皇庁のお膝元だけあってヴィツラ庭園のメッカでもある。マックドガルは一冊の論文集成、『泉水・彫像・花々——一六、七世紀のイタリア庭園研究』を挙げておこう。献辞や序に Richard Krauthemer, James S. Ackerman などの高名な学者、また Dumbarton Oaks の名称を見出し、学問史を目的の当りにしている感に打たれる。

両研究者が必ずしも専門地域にしなかったフィレンツェにも郊外の別荘は多く、そこには通常、花壇が農園、菜園と一体化した庭園であり、研究の蓄積量もこれに応じて多い。そのなかでも格別に注目してよいのは、ポッジョ・ア・カイアーノのロレンツォ・デ・メデイチのヴィツラであろう。ここではフォスターの学位論文とバルダツツイとカステラーニの名著を挙げるに留めよう。両著は書物の体裁が対照的だが、補完し合い、意味ある著作である。

郊外の庭園にはそこで過すためのヴィツラ (villa, 複数形は ville) がつきものであり、庭園研究と建築研究は表裏一体の関係にある。したがってコッフィンのように双方の研究業績を挙げる人も珍しくない。さらに庭園には池泉が不可欠であるために水理工学と密接に関わる。もちろん庭に生える植物や樹木を忘れるわけにはいかない。またこの植物も何も觀賞用だけでなく、食材や薬草の側面をも逸することはできず、農学や薬学と深く関わってくる。そうなると土壌学や地質学も大きく関与するであろう。またイタリアゆえの歴史的過去があり、考古学的学知も必要となろう。あらゆる知識のもとで管理、維持されてきたのがヴィツラ庭園である。庭園理解には多岐の分野に通じておくことが肝心であろう。

ルネサンスは時に都市文明が招来したものとと言われる。ブルジョワ社会の産物である。特にイタリアでは今日の統一国家以前の状態にあり、中世以来、都市国家の形態を取っていた。この冠されている「都市」なるものに注意する必要がある。つまり、観光客であふれる、いわゆる旧市街、歴史的な中心地 (centro storico) の都市部に尽きるものではなく、内部の都市街区とこの都市を囲む市壁の外側地域とが一体化した世界が都市国家の社会であった。周囲、四圍の平地丘陵や河川渓谷を含めてこの国家は考えなければな

らず、都市住民、特に裕福な市民層や貴族層の生活は市内だけで終始し、帰結してはいなかった。庭園研究の中心地となるフイレンツェでは、古代ローマ人同様にそれらの層の日々の生活は公的な仕事を成す壁内と私的な楽しみをもたらず壁外に区分された。それは忙殺、negotium と閑暇、otium の違いとも言えようか。かつてのフイレンツェから今日のフイレンツェに移るならば、ルネサンス人同様に現都市民は普段は市内でせわしく働きながら、週末あるいは長期の休みは郊外の畑ある小村で過ごす生活スタイルが理想的にあるように思われる。広く villeggiatura と言われる生活習慣は古代から連綿と続く、イタリア半島と島嶼の生活様式を端的に表わす重要用語である。

(2)

庭園学はしたがって魅力的な主題となりうる。腰を据えてこの題目を取り上げてくれた著者はまたもや桑木野幸司氏である。本論の書評はこのために執筆される。またもやと言うのは、記憶術の前著があるからである。そして今回の書名は『ルネサンス庭園の精神史——権力と知と美のメディア空間』（白水社、二〇一九年）と謳われている。前著同様に、専門的に難解な箇所を有する書物再来かと思われた。それに「精神史」とあり、欧米の名うての研究者さ

えも付けていない漢字が並び、読む前に身構えてしまった。ところが読み始めてみて安堵の胸をなでおろした。桑木野氏が「あとがき——言の葉が舞う庭」でこの「精神史」使用のわけに触れているのだが、評者と違う意味でこの概念を用いていることが分かり、ここではあまり深く考える必要にはないと思うに至った。それよりもあとがき冒頭から著者の名字から切り出しているように、この著作は肩肘が張らないイタリア・ルネサンス庭園の案内書なのである。もっとコンパクトな版になれば、読者は手に携えて桑木野氏とともに旅することができる、そのような書き物となっている。挿入されている写真は多くが著者撮影であり、読者は現場に行けば、本文とともに納得することになるであろう。口絵にあるカラーの図解などもそのためであろうか。また庭園の位置がたとえばローマから距離的に幾ら離れているかが欠かさず示される。あるヴィツラは約一〇〇キロとある。評者も同じく車で出かけた場所であったので、そんなに遠方だったのかと思った次第である。ただし私と違い、著者は自ら車を運転して各地を訪ねている。

同氏は他の著書が明示しているように、ある主題を総合的に書き上げる力の持ち主であって、それは驚くべきことである。これには勤勉の慣習、ハビトウスがなくては叶わず、一朝一夕にでき上った性ではない。

ここで本書の内容を示すべく、目次を挙げてみよう。長い記述を支える旅路も亦、広範囲にわたって計画的、集中的に為されたことであろう。

序 イタリア・ルネサンスの庭園史の射程

第一章 古代・中世の庭園文化

第二章 ルネサンスにおける風景の発見

第三章 メデイチ家の初期のヴィツラ庭園

第四章 天オドナート・ブラマンテの造園革命とその影響

第五章 象徴化するランドスケープ——ラッファエッロの夢

第六章 庭園に再現された地誌——庭を読む視点の誕生

第七章 コレクション空間としての庭園——「庭の掟」と植物園の世界

第八章 黄金時代——ヴィツラ・デステとヴィツラ・ラ

第九章 マニエリスム庭園の極北——グロッタ・グラン

デとプラトリノ

結び 終わらない宴

さらに各章には二ないし三の見出しがあった節があつて

分かりやすいが、ここでは割愛した。読み進めるうちに、

同氏は自らの「言の葉」を振りまく。「(と) おぼしい」という独自の表現に幾度も出会う。このような語彙に限らず、何箇所も、論理的叙述から離れた文学的表現とも出くわす。読者は著者がそばにしていると感じよう。また専門術語が当然のように顔を出すのだが、軽やかな筆致のなかでそれらは前後の文脈から理解ができるようになっていく。明らかに著者は通読の妨げとならないように読者を慮っている。これらは同氏の他の著書にも見られる。

先に「精神史」なる用語を問題視してみた。考えてみれば、「権力」なる用語も副題に見られる。だが、本書では権力が政治史的に問われているとはいえない。このため著者としては自らの著書を精神思想的な思いを込めて、「精神史」であると言いたかったのかもしれない。評者はロレンツォ・イル・マニフィコをロレンツォ・豪華公（「豪華」と「公」）とするのはまちがっていると考えるのだが、桑木野氏はその場合、他の研究者に往々みられるように政治権力とメテオナティズモ（恩顧・愛顧主義）の実態を独断的に結合させてはいない。このため豪華公としたことに極端な引っかかりはなかったと告白しておきたい。なお豪華公とせず、イル・マニフィコとのみ出てくる箇所が一つだけあった。

さて、順次ページを追っていきこう。序には本書の狙いが披瀝されている。そのなかで領域横断的な新たな庭園史が

一九八〇年代から続々と発表されるようになったとして、ひとりエウジェニオ・バツティステイの名が出てくる。評者としてはそのような研究はもう少し前から始まっていたのではないかと見ているのだが、学問を開始する時期に比べて研究史の有り様が研究者間、世代間で多少変わってくる、あるいは異なってくるように思われた。対象とする時代を変容のなかで捉えようとするのがわれわれの歴史研究であるとすれば、時代の推移を、そしてその力勢をわれわれも亦受けているのであろう。

第一章は古代と中世の庭園観に割かれている。そこで「ロクス・アモエヌス」閉ざされた庭（ホルトゥス・コンクルーサス）などのお馴染みの用語が出てくる。また特にローマ人のオーティウム（閑暇）とヴィッラ庭園との関係性への言及があり、ルネサンス、再生の予防線となつていようか。ローマ帝政期から廃れ、中世には意識が遠のく関連性なのである。皇帝や国王の私的庭園や修道院の菓草園などに一家言がある研究者からは簡略化された叙述のゆえに異論が出されるかもしれない。足早な記述は第二章に入ったルネサンス初期にも見られ、中世史研究者だけの不満では終わらないかもしれない。ルネサンス開始の三大文人として、一四世紀のダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョが定型通りに登場するが、本書の庭園史はボッカッチョから本格

化していく。それゆえにそれまでは助走に過ぎないかのようには早々と後景に退いていくのである。

ボッカッチョの自然観には旧来の道徳観に左右されず、審美的、官感的な態度が顕著になっていくとして好例が引用されている。そして一五世紀に入り、真つ先に登場するのはレオン・バツティスタ・アルベルティであり、ここにヴィッラ庭園と切り離せない建築家が誕生し、アルベルティの建築論はその絵画論とともに同時代と後世への影響が大きかった著作である。桑木野氏は活版印刷到来の時代性を重視し、アルベルティ作の印刷発行年への言及を怠っていない。写本中心の中世とは異なる印刷本時代のルネサンスの画期に触れている。なおアルベルティに対し、同じく *uomo universale* のレオナルド（ダ・ヴィンチ）が嫉妬を覚えたところがあるのだが、何か史料の根拠があるのだろうか。

本書が観光案内に役立つと特に感じられ始めるのは、ピウス二世のピエンツァの町が取り上げられた時からである。建物と四囲の景色、世界遺産であるオルチャ渓谷への言及があり、この町で持った著者の感懐に評者も痛く同意するところである。ただ、こちらには都市工学の知識が乏しいためか、この町の小さいながらもその全体像が掴めず、今一つ理想都市ぶりが見えてないところがある。一九世紀に刊行されたレペッティの自然地理・歴史事典でピエ

ンツアを見る限り、かなりの頁が割かれていて、重要都市と分かる。「世界遺産」となる所以は地理環境だけではないのであろう。

第三章に入り、いよいよヴィッラ庭園の真骨頂が現われ始める。数々のメデイチ家所有の別荘が話題を提供して、フィレンツェの政治と文化の歴史のなかで叙述されていく。いずれにあつても評者にも親しいヴィッラだが、市内メデイチ家邸から最も近いフィエーゾレの別邸がかなり詳細に扱われ、著者の筆が冴えわたる。ここは立地条件が厳しいのだが、以後、段差ある別邸の見本となる。カレッジに関してはロッジヤ設置の意義が説かれている。また全体的にジュスト・ウテンスの絵画資料と現実のヴィッラ庭園の相違が指摘されている。

第四章は建築家ブラマンテに割かれる。巨匠多いルネサンスにあつて見落とされ、割を食っているのではないかと思われる人物だが、著者によつてベルヴェデーレに心血を注ぐ叙述がなされ、いずれの巨匠にも劣らぬ重要人物と認識できた。本章は次の第五章、第六章、第七章と密接に関連する。先ずはブラマンテと同郷で親友であつたラッファエツロが登場する。著者はそれを「ヴィッラ・マダーマ幻想」として描く。ラッファエツロもまたヴィッラ庭園、すなわち建築的才覚をも持ち合わせた画家であつた。また都

市ローマの景観と歴史を顧慮する方針を打ちたてた。署名の間の各テーマが狭い空間を抜け出して都市ローマの方位、方角と深く関わることを、著者は強調している。ブラマンテ、ラファエツロ双方にとり、教皇ユリウス二世の役割は小さくない。

第六章ではローマ市内にあるヴィッラ・ジュリアの特徴が指摘される。また同章ではフィレンツェ郊外に戻り、メデイチ家のヴィッラ・カステッロに叙述が及ぶ。ニンフェウムやグロッタの関係もあろう。また庭にいかんにか権力を表出するかの問題が双方にある。眼差しの方向と統治権力の有り様が指摘される。ヴィッラ・ジュリアの場合は水管理支配する権力者となろう。ウイルゴ水道の存在がある。第七章ではローマのヴィッラ・メデイチ、ピサの植物園などに言及され、それぞれの庭園は一般に開放されていたという。世界中から集められた物珍しい草木、またその研究などが園芸学などの科学史の観点から叙述されるとも、また植物園の持つ審美性や魔術性も考慮されている。観念連合の記憶術を想起させるが、著者はここでは深入りを避けている。

第八章及び章としての最終章である第九章は、大庭園のヴィッラ・デステとヴィッラ・ランテ、またフィレンツェに戻つてプラトリーノのメデイチ別邸などが登場する。特

にエステ家の庭園とマニエリスム時代に入っていると目されるプラトリノが詳述される。現代のフイレンツェ人は後者をヴィツラ・デミドフと呼び、必ずしもメデイチ家時代のことに関心を有しているように思えないのだが、著者は実に丹念にヴィツラ・デステの場合と同様に、プラトリノの過去の姿を明らかにしている。

当地を訪れた、天正遣欧使節への言及もある。これはプラトリノにおいてのみなされているが、日本からの一行はヴィツラ・ランテもヴィツラ・デステも、またフアルネーゼ家のカプラローラも知っていたのである。リアルタイムで庭園とその施設を目の当りにしたのであった。

ヴィツラは現代のイタリアにもある。ローマにある Villa Torlonia はかつて住んでいた方位にあり、親しく見学したことがある。もちろん庭園もあった。だが、ここはまだ本書に描かれたヴィツラのような歴史を有していない。このように豪壮な建物があり、持ち主の生活が現代にもあったわけだが、農業形態を始め、生活環境が大きく変わった今日、昔のヴィツラ暮らしを知るのは容易ではない。この意味でも本書は意義深い。実地に足を運び、古文献を博搜したうえで綿密に組み立てられたこの邦語文献の登場により、わが国のルネサンス文化史の分野は一段と厚みを増したのである。

註

- (1) Alexandru Marcu, *Il valore dell'arte nel Rinascimento. Traduzione dal romeno del prof. Giorgio Caragata e Renato Venturini*, Istituto nazionale di studi sul Rinascimento, edizione fuori commercio, Firenze 1943. ルーマニア本国ではルーマニア語版が、一九四二年に次いで一九八二年にも出ている。
- (2) *Die Kultur der Renaissance in Italien. Ein Versuch*, Basel, 1860.
- (3) *The Italian Garden*, Dumbarton Oaks Trustees for Harvard University Washington, District of Columbia, 1972.
- (4) *The Villa in the Life of Renaissance Rome*, Princeton, 1979. *Gardens and Gardening in Papal Rome*, Princeton, 1991. *Pirro Ligorio. The Renaissance Artist, Architect, and Antiquarian with a Checklist of Drawings*, University Park, Pennsylvania, 2004.
- (5) *Fountains, Statues, and Flowers. Studies in Italian Gardens of the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C., 1994.
- (6) Philip Ellis Foster, *A Study of Lorenzo de' Medici's Villa at the Poggio a Caiano in Two Volumes*, Garland Publishing, Inc., New York and London, 1978. イタリア語版にId., *La Villa di Lorenzo de' Medici a Poggio a Caiano*, Comune di Poggio a Caiano, 1992. ほか Raffaella Fabiani Giannetto, *The Medici Gardens of Fifteenth-Century Florence. Conceptualization and Tradition. A Dissertation in Architecture*, Presented to the Faculties of the University of Pennsylvania, 2004. 拙著『ルネサンス文化人の世界』知泉書館、二〇一九年。観光大国イタリアではまた、別荘も教会、修道院同様に役立つガイドブックの小冊子が多い。Scala, Giunti, Electa などの発行のものもそれである。このため奈良や京都などで歴史的建造物や庭園に関わる冊子を手にするときに、彼私の程度の差を感じるのは評者だけだろうか。
- (7) 桑木野幸司『叡智の建築家——記憶のロクスとしての一六——一七世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版、二〇一三年。『イタリア学会誌』六四巻、二〇一四年、根占 献一による書評。
- (8) 『薔薇のイコノロジー』の美術史家若桑みどりは、ある批評家から題名と氏名の連関性を指摘された。
- (9) 一点だけひとりの別の名前が撮影者（知人だが）として挙がっている。ここは私がローマ滞在の折に目的を持って訪ねた橋でもあった。またカジーノの写真が挙がっているが、珍しく撮影者名がない。文献として、Graham Smith, *The Casino of Pius IV*, Princeton University Press, 1977. 序にロニンインの名が出る。また *La Casina Pio IV in Vaticano*, Città del Vaticano, 2005. 当時のローマ教皇ピオネ デットー六世の肖像写真付き。
- (10) 桑木野幸司『記憶術全史——ムネモシユネの饗宴』講談社選書メチエ、二〇一八年。
- (11) Pienza の立項として、Emanuele Repetti, *Dizionario*

桑木野幸司著『ルネサンス庭園の精神史』（根占）

geografico, fisico, storico della Toscana, volume quarto,
FirenzeLibri, 2005 (1844).

（学習院女子大学名誉教授）